「日々の理科」（第 1393 号） 2018（H30),-4,30

「春の山小屋にて（１）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中　千尋　Chihiro Tanaka

４月の浅間高原は面白くない。地上の雪は消えているのに、新緑はまだ遠い。しかし、４月も下旬になると様相は一変する。長い冬を越した生き物たちが、爆発的とも言える活動を開始するのである。

これが私の「山小屋」の庭。古い「母屋」（左側）と、スウェーデン風の「離れ」がある。離れにはロフトがあって、お客さんが多い時は３～４人は泊まれるようになっている。離れの天井付近にある四角い小さな窓の内側には、浅間山観測のカメラが２台設置されていて、東京から遠隔操作できるようになっている。

こちらは裏庭。私の山小屋は古くて狭くて、壁はアカゲラ（タチの悪いキツツキ）が穿った、穴だらけである。しかし広さと自然環境だけは自信がある。土地は約 400 坪、シラカバとカラマツの森に囲まれ、広い草地と「マイ・キャンプファイヤー・サークル」も完備している。テントも張れて、15 人ぐらいは宿泊可能だ。（今までの最高記録は一晩で 13 人）毎年夏休みには、理科教育の仲間や、友人の家族が団体で来てくれて、毎日バーベキュウ大会。これが実に楽しい。

裏庭の林床は、カラマツの落ち葉で覆われている。あまり掃除をしていない。あえて掃除をせず、このあたりの自然環境そのままに「風致」するようにしているのだ。４月も下旬になると、さまざまな野草が花を咲かせる。今の時期に一番多いのはスミレの仲間だ。

こちらは「シロバナエンレイソウ」ユリ科の多年草で、正式な和名は「ミヤマエンレイソウ（深山延齢草）」 *Trillium tschonoskii* という。花弁のように見えるのは「内花被片」と呼ばれ、実は花びらではない。外側の３枚の緑色のものは「外花被片」と呼ばれる。高原の春の林に、ひっそりと咲く美しい花だ。